
男子高生のつくりかた

乙木ありす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男子高生のつくりかた

【Nコード】

N3045Y

【作者名】

乙木ありす

【あらすじ】

なんで女に生まれたんだろう。女なんてつまらない——
なんて面倒なことに不満を抱く女子高生吉元真は、17歳の夏にとんでもない計画を実行した。その名も「男のフリして一人旅大作戦」！

女だったらできないような冒険を期待して、着の身着のままの一人旅にいざ出発！・・・したはずなのに、犯罪組織に追われる身となってしまう。

成り行きで同行することになった辛口探偵雪代晶ゆきしろあきりと共に事件解決に向け奔走するうちに、真の中で何かが変わり始めてきて・・・。

少女のひと夏の冒険を描いた物語です。

現在ケータイ小説サイト「野いちご」にも掲載中です。

男に・・・（前書き）

一人称の小説に、チャレンジするつもりで書き始めました。中編ものになる予定で、書き上がったら投稿してみたいなと思っています。

ですのでできましたら、おかしな所などじゃんじゃんご指摘いただけると助かります！

最後まで書ききれよう頑張りますので、お付き合いよろしく願います。

男に・・・

ガタンゴトン ガタンゴトン――

やっと馴染んできた揺れがふとなくなった頃。
私――いや、今日から私はしばらく俺なのだ。
俺はゆっくりとまぶたを開いた。

腕時計を見ると現在午前1時58分。
随分眠ったと思っていたけど、大した時間は経っていなかったよう
だ。

この夜行列車「ムーンライトながら」は全席指定席なのだが、車内
が閑散としているせいかみんな勝手に席を選んでいるのだろう。
ボックス席ぜんぶ占領して、荷物やら足やらを座席に乘せている。
うつむいたり、丸くなったり格好は様々だが、とりあえず俺から見
える範囲の人はみんな眠っているようだった。

「ふあ・・・」

大きく伸びをして、物音を立てないように席を立つ。

室内は薄明るいのに、物音ひとつしないこの空間はかなり不気味だ。

(・・・にしても)

無茶なことを考えたものと、今更ながら自分の単純な思い付きを
笑ってしまう。

ことの発端は・・・といっても大したことじゃない。
本当はずっと不満に思っていたことだ。

俺の名前は吉元 真、17歳。県内の公立高校に通うれっきとした
“女子”高生だ。
ある日の昼休み、食事が済んだあと中庭でバドミントンをしていた
時のこと・・・

木に羽が引つかかってしまい、俺は本領発揮といわんばかりに木に
よじ登り羽を取ろうとした。

ところがそれを見ていた現国担当の鈴木先生がこう言ったのだ。

「女の子が、そんなことするのはよしなさい。下着が見えるわよ」

って。まるで頭を殴られたようなショックだった。

鈴木先生は人気のあるおばちゃん先生で、俺もファンの一人だった。
生徒ひとりひとりと向き合ってくれて、先生だけはそんなこと言わ
ない人だと思ってたのに・・・

けどその瞬間、怒りや悲しみの感情が湧くこともなく、逆に頭の中
から何かがスーッと引いていくのを感じた。

今までずーっと、「なんで男はよくて女はだめなの？」とか「男ば
っかりずるい」とか頭に来てたことが、急にバカらしくなっていま
った。

だって鈴木先生でさえこんなことを言うのならきつと、俺が女に生まれた限りずっとこんなことが続くんだとわかってしまったから。そこでなんかふと、ふっきれたというか・・・

俺の中で答えがクリアになったんだ。

男になんきやだめだつて。

そこで！

思いついたのがこの『ザ・男になって、青春１８切符で一人旅！』だった。

地元じゃ男のフリしたってバレちゃうし、まず家族に止められる。

けど、俺は別に女の子が好きだとかそういう方面で男になりたいわけではないので、ちよつとの間気分を味わって気晴らしできればいい。

そういう理由から、この計画は非常に有効なものだと思われた。

（青春１８切符なら高校生のお財布にも優しいし）

親には親友と旅行に行くと言ってあるし、その親友にも口裏合わせを頼んである。

親友の名は浅田涼香。

涼香とは高校一年の時から友達で、俺が常々「女であること」に對してぐちぐち不満を漏らしていることを知っていた。

計画について相談すると、最初は「危ないから」と反対してたけど、バドミントン事件の時も一緒にいたし、何度も食い下がると「これつきりだからね」としぶしぶ協力してくれたのだ。

涼香は優等生だし、うちにも何度か遊びに来てるから、両親からはすんなり許可をもらえたってわけ。

それから、中三の弟に適当な（文化祭の出し物で使うんだ）理由をつけて服や小物を巻き上げたりと準備をして、とうとう今日という日を迎えることができたのだが。

いざ一人でこんな夜行列車になんか乗ってみると、急に心細くなったりして・・・

（いや、しっかりしろ。まだ始まったばかりじゃなか！ この旅行の間は男でいるって決めたんだろ！？）

だいたい本当の男だったらこれくらいの状況、怖いわけがない。

男に・・・ 2

がらがら がらっ

自分で自分を奮い立たせて、トイレへ向かう扉を開ける。
間延びした扉の開閉音が、また俺のテンションの足を引っ張ろうとしたその瞬間――

（うおっ！）

ドアの死角部分に、張り付くように立っている男の存在が俺を驚かせた。

その男は中肉中背、ガムをくちやくちやりながらゆっくりとこちらを振り返る。

（ひい）

ちょっと止めてよ、そんな振り返り方、不気味だっ！
俺は悲鳴を上げそうになりながらも、なんとか飲み込むことに成功した。

見ていいんだか、見ないほうがいいんだか、まごついていると

「おめえも若いのに、大変だなあ」

いかにも頭の悪そうなるれつで、男が話しかけてきた。

「？」

夏なのに長袖ジーンズ。

茶色のキャスケット帽からはパサついた金色の短髪が数束こぼれているこの男。

見た目で人を判断してはいけないといわれているが、とても直視していて気持ちのいい対象ではない。

あんまり夜行列車に乗るタイプには見えないし、こんなところで無賃乗車でもしようとしてるんだろうか・・・

「・・・・・・・・」

いやいや、こんな風に見えても案外鉄っちゃん、線路をがたがた走るこのノイズすら愛しく感じているのかもしれない。

・・・なんて勝手に想像していると

「んで、おめえ 席は？」

「え？」

「せきは、どこだって聞いてんだ」

「せき？」

男は続けて質問を投げかけてきて、つい反射的に聞き返してしまう。ただでさえ電車の中、滑舌の悪い男がガムを噛みながらだからなおさら何を言っているのか聞き取りづらい。

「席だよ！ どこなんだ！？」

「じ、１１―Aだけど」

「１１―Aか」

突如語気の荒くなった男にびびって反射的に答えると、男は満足そうに笑みを浮かべた。

「便所は左側だぜ。ぼうず」
「はあ……」

何だかわけがわからなかったが、ぼうずと言われたことが妙に嬉しくて俺もへらりと愛想笑いを残し男の横をすり抜けた。

ひよっとしたらただの気さくなあんちゃんなのかもしれないし、案外男同士だとこんな風に初対面でもしゃべるのかもしれない。

けどやっぱりもう一度男を振り返る勇氣はなかったので、そのままトイレの扉を開けた。
すると……

「お」

洗面台の上にある、一枚のカードが目に残る。

とりあえず用を済ませて手を洗ってから、そのカードを拾い上げた。

（Suicaじゃん。誰かの落とし物かな？）

それはJRで発行してる電子カードで、俺も普段は定期券として使っている。

ただ俺のと違ってこのSuicaは無記名だった。

無記名だから落とし主は特定しづらいかもしれないけど、入ってる金額によつてはかなり困るに違いない。

（じゃー、駅員さんにでも……）

渡そうか。とドアを開けると――

ぐらり

止まっていた列車が発進したらしく、大きく体が傾いた。

男に・・・ 3

「おっと」

逆側の壁に手をつくと同時に、反対の手で*S u i c a*をポケットに押し込む。

拾い物を落つことしちやまずいもんね。

ついでにちらりと車両側の扉へ目をやると、さっきの場所に例の男は立っていなかった。

入れ替わりにうって変わったハンサムな兄ちゃんが立っていて、ほんと胸をなでおろす。

いやー、やっぱり不気味じゃん。

見た目で判断しちやいけないんだろーけど、見て気持ちのいいものとよくないものがある。

が、

(ひいっ！)

ほっとしたのもつかの間、その兄ちゃんがすごい顔でこっちを見ていることに気が付いて、俺は体をこわばらせる。

「おい！お前・・・」

兄ちゃんはこちらを見据えたまま、ずんずん近づいてくるといきなり俺の胸ぐらをつかみ上げた。

「!!」

「誰に頼まれた!？」

(はあ???)

「くそつ、まさかこんなガキだとは・・・!」

「なに・・・うぐつ」

兄ちゃんと俺、かなりの体格差なのにその力加減は容赦ない。服で首が絞まって、本気で苦しい。

「誰に頼まれたかって聞いてんだよ! どこで受け取った!？」

だから・・・

「ぐぐぐ・・・」

「ぐ? お前ふざけてんのか」

だから苦しいって! こんな状況で口なんかきけるかー!!
思いつきり怒鳴ってやりたかったけど、それすら声にならない。
それどころかなんか目の前がかすんできて・・・これはかなりやばい。

「う・・・ぐう!」

「うげっ!」

一か八か、薄れゆく意識の中俺は思い切り足を蹴り上げた。
狙いを定めてる余裕はなかったけど、すねが男のどこかに当たると、
うめき声とともに男の手が離れる。

「う．．げぼつ、ごぼつ」

俺もやつと解放されてせき込みながら、壁に背をもたせかけた。

．．．本当に、一体なんなんだ？

俺が知らなかっただけで、男ってこんななの？

けどそれもどうよ。いくら男つつたって、いきなり取っ組み合うなんてことは．．．

ちょっとばかりハンサムだったところで油断しちゃいけないんだ。

夜行列車は大勢の乗客が利用しているポピュラーな交通手段だと思つてたけど、昼と夜とでこんなに違うなんて．．．！

とにかくデツキは危険だと、車両ドアに手をかけるが兄ちゃんがしつこく食い下がる。

「おいこら待て！　こんなことしてただで済むと思つてんのか」

「お前が悪いんだろ！　大体何なんだよ、わけわかんねー！　てか触んな！」

「でかい声出すな！　しらばっくれてねえで白状した方がお前のためだ！　運び屋なんてやつとしてそのままとんずらできると思ってるのかよ！？」

「はあ？　運び屋？　俺が何を運んでるっていうんだ？」

「！　このバカ．．．！！」

ちつ、と舌打ちするとそいつは少しだけ、掴んでいた手を緩めて俺の方へ向き直った。

(．．．．．？)

こうして正面から向き合ってみると、顔つきは至ってまじめで、いきなり他人に暴力をふるうような男にはとても見えなかった。

薄い二重に、通った鼻筋。

黒い髪に同じ色のきりつとした眉毛。右目の下には小さなほくろがあつて、そこはかとなない色気が漂っている。

・・・服装は茶系のＴシャツにジーンズと地味目だが、純和風のイケメンだ。

風貌のせいかな、まじめな雰囲気のせいかな、あんなことされたのについて素直に話を聞いてしまう。

「・・・駅で荷物から離れた時間があつたか？」

「?・・・いや、ずっと、持ってたけど」

俺の持ってきた荷物はふたつ。着替えなどが入ったボストンバッグと、貴重品の入ったメッセンジャーバッグ。

ボストンバッグに大事なものは特に入っていなかったけど、服とか借り物だし一応目からは離さなかった。

「複数の人間に話しかけられたことは？」

「いや・・・」

「居眠りは？」

ぎくり

“した”と答える前に身じろいで、俺は質問を肯定していた。

「寝たのか・・・？」

うっ

「うん・・・」

はぁー、とため息をつく兄ちゃん。

そんな態度をとられると俺が悪いことしたみたいだけど、夜行列車
だぜ？

寝るのふつーだろ？？

「どうせ荷物を手離して寝てたんだろ？」

「そりゃ」

そりゃあ網棚に乗せてあったよ！

座席に荷物おきっぱの人もいたけど、夜行列車初心者俺としては
万一隣の座席に予約が入ってたらと思っ、ポストンバッグの方だ
け棚にのせていたのだ。

男に・・・ 4

「つつたく、変なところで気が小さいんだな。・・・来い」

「えっ」

兄ちゃんはその言うといきなり俺の腕を掴み元来た車両へ向かう。

「席は？」

「11―A・・・」

「11・・・」

意図はわからなかったけれど、勢いに圧倒され大人しくついていく。

「11―Aだな？」

「うん。ここ・・・」

就寝中の乗客に配慮して小声で返事をする。
が、

「あつ、無い！」

「しいっ」

兄ちゃんが鋭く囁き、俺は慌てて口を手で押さえた。
でも、でもさ！無いよ、無くなってる！

「俺の荷物が・・・」

「わかったらこっちだ」

「えっ？ でも」

ひよっとしたら何かの間違いでどっかに転がってるんじゃないか。
探さなきゃという俺の思いとは裏腹に兄ちゃんは俺の腕をつかみ、
強引に車両を出す。

「ちょ、ちよっと」

それだけでも驚いてるのに腕を引く勢いは止まらず、デッキ・トイ
レを超えてさらに隣の車両に突入する。

「分かったら大きな声を出すな。次の駅で降りるぞ」

「はあ！？ 降りるって・・・？」

「っち、このバカが」

「。。。わ・・・！！」

うつかり上げそうになる悲鳴を、俺は必死で飲み込んだ。だってだ

ってこいつの手！
人のお尻触ってるって！

「見たまんま軽いな。何食ってんだ」

軽々俺を肩に担ぎ上げると、兄ちゃんは俺が逃げ出せないように膝の裏と腰の下・・・お尻の辺りをがっちり押さえてそのままずんずん、車両を通過していく。

「この痴漢男！」とでも罵ってやりたい気持ちは山々だったけど、悲しいかな俺は男へと身をやつした人間。そんな文句を言おうものなら気持ち悪がられるか、下手したら男装がバレてしまう。てか、こんなカツコで移動してる方がよっぽど人目に付くと思うんだけど。

「皆寝てる。声さえ立てなきゃ気づかねえよ」

・・・ああそう。案外ちゃんと人の話聞いてるんだね。
低く、ゆっくりと吐き出された声に俺も少しだけ落ち着きを取り戻す。

こんな格好で落ち着くっていうのも変な話だけど。

「・・・次の駅で降りるって、なんで？ 降りてどうすんの？」
「それは降りてから話す」

ふうん。

俺は抵抗する意思を手放し、兄ちゃんの肩にぶら下がるマグロに成り下がった。

これがただの誘拐魔とかなら死んでも暴れ尽くさなきゃならないところだけど、どうもそういう感じじゃないと俺には感じられた。

話の流れとかやり方とか、たださらうのが目的ならこんな風に回りでいことはしないだろう。

俺のカバンが無くなった経緯も、この人はどうやら知っていそうだし。

それに降りたら理由も話すって言うてる――

・・・でも万が一本当にやばそうだったら大声出して駅長室に駆け込もう。

そう心に決め、俺は浜松の駅に降り立ったのだった。

行き先は・・・

「・・・えーとつまり、あんたの話を要約すると、俺“麻薬の運び屋”させられちゃったの？」

軽自動車の助手席に腰掛けながら、自分に言い聞かせるように呟くと、兄ちゃんは驚いたようにわざとらしく目を見開いた。

「平たく言えばそうだ。アホかと思ったけどなかなか理解が早くて結構」

「ちよつとその余計な一言やめてくれる？ これでもへこんでんだから」

兄ちゃんの説明によると、俺が居眠りしてる間に何者かがカバンに麻薬を紛れ込ませ、俺が席を立った隙に仲間に指示してそれを持ち出させた・・・というのが事の顛末だと思われるらしい。

と、こんなふうにならつと書くと「へえそりゃ珍しい体験をしたもんだね」と頷きたくなるが、当の本人にしてみればそう簡単に終われない。

「そんなヤバイもんが入ってたなんてぜんぜんわかんなかった」

息を吐きながら右手を額にあてる。

そんなものが入ってるなんて知らなかったし、誰かが俺のカバンを開けることなんてなかっただろうけど、万が一人目に触れていたら・・・。

確か持つてるだけで犯罪なんだっけ。

「まあ荷物取られたのは残念だったが、気づかなかったのは幸いだ。中身を見てたらただじゃ済まない」

にやり、と兄ちゃんは目を細めてダッシュボードに放り投げてあったタバコの箱を引き寄せ、箱の口をこちらに向ける。

「やる？」

「・・・俺がハタチに見えるんなら」

「あ、意外と真面目だな。こんな時間にふらついてるくせに」

「ふらついてるって！こんなことがなきゃ・・・っていうかあんなに電車から引きずり降ろしたんじゃないかよ。しかも手際よく車なんか手配しちゃって」

ムーンライトながらを浜松の駅で降りると、兄ちゃんは自販機のコーヒーをおごってくれた。

喉を潤しつつ、俺は事の成り行きを話し、兄ちゃんは事の真相を（ってもまだ想像の範囲だけど）を聞かせてくれた。

そして動揺している俺を引っ張って・・・そのままレンタカーショップへ直行したのだ。

・・・結果俺は東京行きの車に乗っている。

「あのまま列車に乗ってどうするつもりだったんだ？手ぶらで京都観光か？どうせなくなった物一式買い直すほど金持っていないだろ」

「それはそうだけど・・・」

くやしいが兄ちゃんの意見は正しい。

俺は数日凌ぐくらいのお金しか持ってきてない。なくなる頃には帰ろうと思っていたのだから、カバンごとなくなれば服どころか下着も口クに買えやしない。

それに俺はデツキで例の怪しい男と顔を合わせている。

兄ちゃんの仮定する真相が正しければ、あのまま電車でウロウロするのは利口な行為とは言えなかっただろう。

まあ運び屋うんぬんの連中はとくに電車からおさらばしてるんだろうけど、万が一車内に残ってて、俺がカバンを必要以上に探し回っているのを見たら（まあ、ホントは少しくらいは探したほうが自然だったんじゃないかとも思うけど）、中身を見たんじゃないかと疑念を抱かれる可能性もゼロではない。

——ともかく、さつさと姿をくらますのが一番だったことは間違いない。

「それより都内に行くって聞いたけど、家にも寄ってくれたりする？」

形勢が悪いままでは居心地悪いので、話を変えてしまう。

俺の地元が千葉だと話すと、兄ちゃんは急遽東京へ向かうことになったから、よければ乗ってけと誘ってくれたのだ。

だから口は悪くてもそんなに嫌な野郎では・・・

「誰がヤロー相手にそこまでするか、ばあか」

「バカ？」

——ないと思ったが、前言撤回。悪人じゃなくても、やっぱり嫌な奴だ。

いーっと思いい切り眉をひそめて嫌な顔をしてやったけど、兄ちゃん
は意に解した様子もなくタバコに火を付け、それを一度深く吸った。

吐き出された煙が薄く開いた窓の隙間へと、またたく間に吸い込まれていく。

・・・まあわかってたことか。初対面からこいつに良い印象別な

んか無かったし。

それに東京から千葉、当初行こうと思ってた京都よりは断然近い。それにこんなことになったとはいえ、せっかく人生最大のイベントに挑む意気込みだった俺としては、初日に家に「置き引きにあった」と引き返すのはいささか味気ない。

（・・・あ、そうだ。弟に何て言い訳するか考えとかなきゃ。借りたもの文化祭で使っちゃって言うといたんだよな。確か）

「・・・・・・・・」

「そうだ。今更だけど」

本当に面倒くさいことしてくれたな、悪人連中め。と心中で悪態をつき始めた頃、兄ちゃんも座席から腰をうかし、お尻のポケットから白い紙を取り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3045y/>

男子高生のつくりかた

2012年1月7日16時54分発行